

巻頭言



アブラヤシの夢

主婦連合会 副会長
—— 加藤 真代*

アブラヤシは、学名を *Elaeis guineensis* といい、ココヤシに比べると幹が太くごつごつしていて、20メートルくらいにまで成長し、直径4 cm × 長さ5 cm 前後の実が一つの果房に数百個つくそうである。Elaeis とは「油を生じるもの」という意味だそうで、中果皮は油分に富んでいるので、これを圧搾して得た油がパーム油で、ロウソクや石けんの製造原料になるとともに、近年は車のガソリン用に原油と混合して使われてもいるそうである。種子中の胚乳は、食用にもなるので、マレーシアやインドネシアは、世界各国に輸出しているそうである。消費者の自然志向で、パーム油を原料とした高級アルコール系合成洗剤や非イオン系合成洗剤となって、私たちの身近にもきているようである。

・・・そうである、・・・ようである、と書くのは、この種の知識が浅い私としては、教えてくれた信頼できる仲間の言葉を、ここに借りてきているからである。他人の言葉を借りてまでも私がアブラヤシについて語りたいのは、次のような理由があるからだ。

ココヤシが主に海岸線に生育するのに対して、アブラヤシは内陸部でも生育できることから、マレーシアのサラワクなどでは、熱帯雨林を切り開いて大規模なアブラヤシプランテーションが造られたり、火を入れて野焼きをすることは、熱帯雨林破壊の原因になるとの批判の声が、環境 NGO から上がっている。大規模プランテーションは大手資本によるもので、これまでそこに暮らしてきた人々にとっては、生きる場であった伝統的所有地を奪われることもある。私の信頼する仲間というのは、このような形で、アブラヤシの植林をして、企業化しようというのではない。

アブラヤシは、柔らかで肥沃な土地が適し、酸性度 4.0 ~ 6.5 の度合いに雨水がひと月 150mm 程度加わるとよいそうで、タイでも収穫されている。そこで、地元の人々が、これまで営々と作り上げてきた「学校（生き直しの学校・カンチャナプリ校）」の隣接地 9.7 万坪の土地にアブラヤシをいっぱい植えて、緑豊かな環境を作り出すとともに、そこから得られる収益で、学校の運営を図ろうというものである。植林、管理などにかかる人手は、もちろんこの事業を志したドゥアン・プラティープ財団とその関係者、近隣の農家の人たちである。有機栽培で、環境にも配慮した栽培の予定である。この土地は緑が乏しいので、熱帯雨林を切り開いて森林を枯渇させるのとは反対に、植林で緑を増やし、生態系を回復させていこうという計画である。

* 当研究所参与

ドゥアン・プラテープ財団については、すでに多くの方々をご存知かとは思いますが、始めての方もあろうかと思うので、少し紹介させていただきます。

この財団は、バンコク最大のスラム・クロントイにあって、四半世紀にわたって、地域住民のために教育、健康、社会福祉、人材育成、緊急対策を、さまざまな形で遂行してきている。日本にもいくつかの支援グループがあって、その活動を支えているが、この財団が長年にわたって、活動を拡げ深化させてきた源は、なんとと言っても創設者で現在事務局長のプラテープさん（Prateep Ungsongtam Hata）の高い志と強い信念、そしてエネルギーギッシュな実行力にあるだろう。

プラテープさんは、自身もスラムの中で生まれ、6歳から物売りや船の錆とりをして働くなど厳しい環境で育ったが、幸い夜間中学に通えるようになった16歳の時、自宅で「1日1パーツ学校」（当時のお金で日本円約15円）を開いて近所の子どもたちに、勉強と給食の提供を始めた。1978年にアジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受け、これを資金に財団の設立をして、活動を広げ、現在に至っている。

この間に、教育里親制度を通じてたくさんの子どもたちが勉学を助けられ、お年寄りが医療の機会を得、有毒ガス災害などから救済されたりしたが、ここに教育里親やボランティアなどで支援という形でアクセスした多くの日本人も、タイの人々との交流を通じて、人の優しさやスローライフの価値に気づかされるなど、たくさんのことを学んだ。

麻薬や暴力のはびこる都会を離れて、南部チュボン県に男子のための「生き直しの学校」が開られて15年、100人近い少年が共同生活を送っているが、ここではゴム園などの収入が全運営費の25%を賄っているそうである。

2000年には、傷ついた少女たちのための「生き直しの学校」を、映画「戦場にかける橋」で有名なクワイ川鉄橋に近いカンチャナプリ県バーンガオ郡に建設することができた。この学校の運営資金を、アブラヤシの植林で調達しようというのが、この度の企画である。

タイの土壌は固くて、そのまま植林しても木が根付かないため、まず成長が早いバナナの木を植えて根付かせてから、その10カ月後位にそのカブの部分を取り、その根元にアブラヤシを植林するそうだ。バナナの木は竹のように伸びていくため、切ったカブの次に出てくる葉っぱが日陰を作ってアブラヤシの成長を助けるのだそうである。最初に植えたバナナのカブを切るのは、そのカブの下の土壌が柔らかくなって、アブラヤシが根付きやすくなるのと同時に、バナナの根が腐ってアブラヤシの養分となってその成長を助けるからだそうである。犠牲になってくれるバナナというこの仕組みも、素人の私には興味深い。

植林計画4400本、5月現在2200本の申し込みがあったが、まだまだ予定数には遠い。1本5000円で、申し込んだ人が好きなメッセージをプレートに書くこともできる。いつか自分の木を見に行くことを夢見て、参加する人が増えることを関係者は、期待している。